

巻頭言

第70回日本放射線技術学会総会 学術大会を開催して

山形大学医学部附属病院 放射線部

江口 陽一



江口 陽一 先生

1. はじめに

JRC2014を、2014年4月10日(木)から13日(日)の4日間に亘ってパシフィコ横浜で開催した。本大会は第73回日本医学放射線学会総会の金澤右会長(岡山大学大学院)、第107回日本医学物理学会学術大会の福土政広大会長(首都大学東京大学院)、日本画像医療システム工業会の小松研一会長、そして私が第70回日本放射線技術学会総会学術大会長を務めての大会であった(Fig.1)。

日本放射線技術学会総会学術大会の参加登録数としては過去最高の4,709名であった。会員の3割近い方が全国から横浜に集まる大きな大会であることを改めて感じた。3学会合計の参加登録数は11,823名、国際医用画像総合展(ITEM2014)への来場者数は22,140名であった。

2. 大会テーマ

JRC2014の大会テーマは『Face to Faces Face to Communities Face to the World -向きあう、



Fig.1 本大会の役員
左から JIRA小松会長, JRS平木実行委員, JSMP齋藤実行委員長, JSMP福土大会長, JRS金澤会長, 筆者, JRS佐藤実行委員長, JRC杉村代表理事, JSRT市田実行委員長

つながる、そして広がる-』であった。このテーマには、どんなに医学・医療機器が進歩したとしても、まず、患者さんと向かい合い、医療スタッフと向かい合い、チーム医療を進め、患者さんのために、国民のために貢献していくという意味が込められていると私は解釈した。この医療の原点は、過去も、現在も、未来も変わるものではない。

大会ポスター(Fig.2)は、3学会の会長・大会長の地元を表す絵文字を用い、少し遊び心のあるポスターとした。大会テーマの“向きあう”には山形名産の「サクランボ」が、“つながる”には岡山県の童話の桃太郎が、“そして広がる”には東京のシンボルのスカイツリーが描かれていたことに気付いたでしょうか。



Fig.2 大会ポスター

3. 合同企画

合同特別講演は、京都大学再生医科学研究所／京都大学iPS細胞研究所の戸口田淳也先生に“iPS細胞研究の現状と展望”と題して、最近話題のiPS細胞についてご講演をいただいた。

合同シンポジウムは、日本医学放射線学会(JRS)、日本医学物理学会(JSMP)、日本放射線技術学会(JSRT)が、ひとつずつテーマを担当した。JRS企画の合同シンポジウム1は、「より安全で確実なIVRを目指して」と題して、医師・看護師・診療放射線技師の立場から、被ばく管理・機器管理、患者ケア、穿刺ロボット開発などの多彩な内容が発表され討論された。JSMP企画の合同シンポジウム2は、「医療被ばくの低減と正当化、最適化のバランス」と題して、4名の講師による講演があった。CT検査の大規模調査により放射線の人体への影響に新しい知見が得られるようになったことは興味深かった。JSRT企画の合同シンポジウム3は「つながる人材育成とスペシャリスト養成」と題して、日本サッカー協会(JFA)の人材育成と、専門医、医学物理士、専門技師の教育について意見交換が成された。JFA特任理事の綾部美知枝先生からは「すべての力をチームのために」と題した講演で、子どもが最も力を発揮できる役割の見極め、キッズ年代での海外経験、試合に出られない選手へのケアなど、指導者に必要な視点について自身の経験を交えながら話された。

4. 学術講演プログラム

第70回総会学術大会は例年通り、特別講演、宿題報告、瀬木賞講演、海外招聘講演、国際交流講演、教育講演、シンポジウム、フォーラム、入門・専門講座、専門分科会プログラム、学生選抜発表など充実した内容であった。今回特記することとして、科研費をテーマとしたJSMPとの合同セミナー、医療被ばくガイドラインの策定に関するシンポジウムがあったことが上げられる。

海外からの講師は、米国からEhsan Samei先生(Duke University Medical Center)、Christopher D. Carr先生(Radiological Society of North America)、Craig S. Levin先生(Stanford University School of Medicine)、韓国からKang, Byung-Sam先生

(Shingu University)、中国からChinese Society of Imaging Technology会長のMing Guo Shi先生の5名の先生であった。

また、中国、韓国、タイなどのアジア各国から50名近い参加登録があったことから、4月12日(土)にはアジアからの参加者とランチョン形式のミーティングを行った。また、その夜には横浜中華街で懇親の場を設けた(Fig.3,4)。みんなの笑顔から、親睦を深めるのに極めて有効な会であったと思われる。



Fig.3 タイ、韓国の方との記念写真



Fig.4 韓国の方との記念写真

5. 一般演題

一般演題は、口述発表415題、CyPos発表214題、合計665題の発表が行われた。口述発表415題のうち英語による発表は海外18題、国内73題の91題で、口述発表全体の20%であった。Fig.5に第70回日本放射線技術学会総会学術大会の演題区分を示す。ここ3年間演題数は横ばいであるが、X線検査と核医学検査が前年度に比較して10～25%程度増加した。

6. 実行委員会企画

実行委員会では、大会テーマから第70回総会学術大会のキーワードを「リスペクト」と「チーム医療」と考えた。まずは、患者さんと医療スタッフに対して「敬意を表し」、すなわち「リスペクト」から始まり、

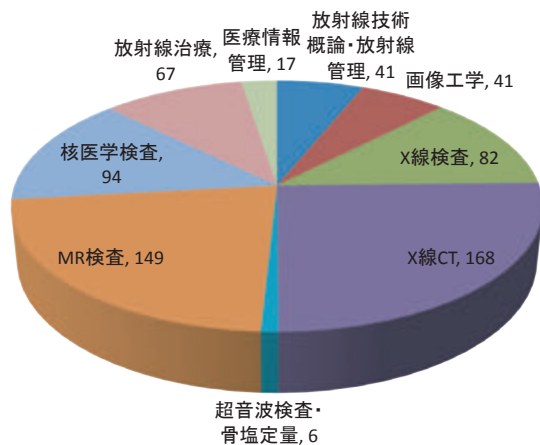


Fig.5 第70回日本放射線技術学会総会学術大会の演題区分

医師，看護師，放射線技師など，それぞれの職種が高い専門性を連携して診療に臨む，すなわち「チーム医療」の実践である。

今回の学術大会では，そのキーワードのひとつであるリスペクト・プロジェクト『大切に思うこと』を推進しているJFAと共同企画を組むことができた。JFAには3つの企画で協力していただいた。

そのひとつとしてITEM2014の会場内に「リスペクトコーナー」を設けた (Fig.6)。JFAからは，JFA会長のメッセージとリスペクト・プロジェクトの紹介。JRC側からは，JRS金澤会長，JSMP福士大会長，JIRA小松会長，それに私からのメッセージが紹介された。また，チーム医療の取組について9施設からスライドショーや動画での紹介があった。いずれも力作ぞろいで，これだけでお蔵入りするのが非常にもったいない作品であった。

二つ目は，先ほど紹介した合同シンポジウム3での綾部美知枝先生の講演である。

三つ目はJFAの審判委員長の上川徹先生による特別講演である。「リスペクトがゲームを支える」と題して，良いゲームは選手との信頼関係のもとで創りあげられていくものであるということ，2006年ドイツでのFIFAワールドカップの映像を交えながら講演された。

このJFAとJRCの合同企画はJFAのホームページ (http://www.jfa.jp/football_family/news/00000647/)にも掲載された。

もうひとつの“キーワード”である「チーム医療」に関連して，日本循環器学会 (JCS) との共同企画を設けた。JCSは他職種の学会との相互協力を深め，チーム医療のもとで最適な医療を目指している。本学会も同様な方針であることから，今回初めてJCSとの合同企画が実現した。

JCS-JSRT ジョイントシンポジウムでは，テーマを「虚血性心疾患における診療と技術のハーモニー - 安全な検査・治療のために知識と技術を共有する -」として開催した。JCSからは桜橋渡辺病院の小山靖史先生と千葉大学大学院の小林欣夫先生に診断と治療の立場から講演をいただいた。また，JSRT側からは，CT，MRI，核医学の最新の撮像技術とPCIにおける診療放射線技師の役割についての講演があった (Fig.7)。JCSの小林先生には技術活用セミナー5で日本循環器学会教育講演として「イメージングを駆使した冠動脈疾患の総合評価」と題して講演もしていただいた。

技術活用セミナーはテーマを「外科手術・インターベンションにおける医療画像の活用法」とした。CT，MRI，RI，X線検査などの医療画像は診断のみならず外科手術のシミュレーションやナビゲーター



Fig.6 リスペクトコーナーの前で
左から 加藤理事，JFA上川様，JFA綾部様，JFA早崎様，坂本実行委員



Fig.7 JCS-JSRT ジョイントシンポジウムの様子

ション, またインターベンションの支援に多く利用されている。CTなどによる3次元画像は, その豊富な画像情報を利用することにより, 安全で確実な治療法に向けて数多くの応用が期待されている。今回の技術活用セミナーでは, 各専門領域で活躍されている医師の方々から実際に手術やインターベンションで必要とされる画像, シミュレーションなどで求められる3次元画像や実践的活用方法, 放射線技師に求める撮影法や画像表示などを解説していただいた。

技術活用セミナーや他団体との共同企画を通じて, 放射線技術学の視野を広げるとともに, 専門性のさらなる向上につながる学術大会であったことを期待する。

7. おわりに

JRS金澤右会長, JSMP福士政広大会長, それに私も含めて昭和30年生まれの会長・大会長で, 終始和やかにJRC2014の準備をさせていただいたことは大変幸運であった。

また, 2年間近く実行委員として協力をいただいた市田隆雄実行委員長(大阪市立大学医学部附属病

院)をはじめ, 坂本肇氏(山梨大学医学部附属病院), 加藤京一氏(昭和大学藤が丘病院), 大沼千津氏(山形大学医学部附属病院)に感謝申し上げる(Fig.8)。それから実行委員会を強力に支えてくれるJRC, JSRTの事務局の皆様, 学会関係者の皆様, JIRAの皆様にご心より感謝申し上げます。

最後になりましたが, 本学術大会の合同企画にご尽力をいただいた日本循環器学会チーム医療委員会委員長の伊藤浩先生(岡山大学大学院), 日本サッカー協会プレジデント・ヘッドクォーターズの安達健様, 早崎誠人様に心より感謝申し上げます。



Fig.8 JRC2014を終えて, パシフィコ横浜の大会ポスターの前で第70回総会学術大会実行委員とチューター
左から 加藤実行委員, 市田実行委員長, 宮野望(山形大学), 小畑伸一郎(山形大学), 大沼実行委員, 筆者, 坂本実行委員

